

関西学院大学 研究成果報告

2025年3月31日

関西学院大学 学長殿

所属：人間福祉学部
職名：教授
氏名：武田 丈

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	多様性尊重のためのソーシャルワーク実践におけるCBPRの有効性の検証
研究実施場所	大学の研究室および自宅
研究期間	2024年 4月 1日 ～ 2025年 3月31日 (12 ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究は、研究計画書にもあるように、2019年04月～2024年03月の期間採択された科研費（19K02258）のフォローアップを目的としていた。科研費に基づく研究では、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」に「多様性尊重」という言葉が明記されたにも関わらず、多様性尊重のための具体的な実践アプローチに関する研究はまだ少ない現状に鑑み、日本社会の多様性の中でも、近年注目されながらまだまだ実証的な研究が行われていないLGBTQ+などのマイノリティのコミュニティに焦点をあて、研究手法としてCBPR（community-based participatory research=コミュニティを基盤とした参加型リサーチ）を用いて当事者たちと協働し、こうしたマイノリティの人たちが抱える固有の課題を質・量的調査で明らかにするとともに、環境改善のためのソーシャルアクションを構築・実施し、その効果測定を行うことで、多様性尊重のためのソーシャルワーク実践におけるCBPRの有効性を確立していった。

今年度の特別研究期間では、科研の研究成果の一部を日本ソーシャルワーク学会第41回大会（2024年6月、東京都立大学）における学会企画シンポジウム「文化的コンピテン」とソーシャルワーク～国籍、在留資格を超えて～」において、「文化的コンピテンに基づくソーシャルワークの実践モデル・アプローチ」と題して発表した。

また、研究成果の公開という点に関しては、2024年5月26日開催の神戸レインボーフェスタおよび2024年10月26～27日開催の関西レインボーフェスタでも研究成果の一部を公開した。

さらに、神戸や関西以外のSOGIEの多様性尊重に対する日本各地での取り組みに関する

情報収集するために、2024年4月19～21日に開催された東京レインボープライド2024、9月14～16日開催のさっぽろレインボープライド2024、9月28日開催の和歌山レインボーフェスタ、10月19～20日開催の金沢プライドウィーク2024に参加した。一方、ジェンダーの多様性尊重という観点では、11月23～24日かけて開催された全国シェルターネットシンポジウム2024inKOBÉに参加して、情報収集を行った。

上記の科研費にも続く調査、および多様性尊重の取組についての情報収集からは、マイノリティ当事者との協働に基づく社会変革のためには、社会の中で特権を有するマジョリティの人たちのアライ（同盟者・支援者）としてのアクティビズムの促進が不可欠であるということであった。そこで今年度の後半は、アライのアクティビズムの促進要因に関する包括的な文献レビューを行い、それを体系的に整理し、論文にまとめた。

「ストレート・アライの促進要因に関する研究の包括的レビュー：Awareness is good, but action is better」と題したこの論文は、『関西学院大学人権研究』第29号（2025年3月刊行予定）に掲載予定である。

この論文では包括的な文献レビューを通して、ストレート・アライのアクティビズムの促進要因に関する知見を整理した。動機・理論・プロセスに関する先行研究のレビューでは、アライに関連する理論として道徳的発達論、社会政治的発達理論（SPD）、接触仮説/集団間接触理論、社会的共感の理論的枠組みを紹介し、アライになるプロセスについては「気づき/認識/意識→知識/教育→手段/技法/環境づくり→行動」という4段階が一般的であるが、アクティビズムについては「アライとしての自覚」を経たうえで「実際にアクティビズムへの参画」という2段階で理解する考え方もあることを示した。また、促進要因に関する先行研究レビューでは、「性別」や「学歴」といった個人の属性、「LGBTQ+の人たちとの交流」や「差別体験」といった個人の体験、「共感」や「マジョリティ特権の自覚」といった個人の認知的特性・性格、そして「活動への誘い・機会」や「アクティビズムに対する周囲の反応」といった社会や環境の要因が、アクティビズムの促進要因として実証研究の中で明らかにされていることを整理した。

アライに関する理論研究のレビューの中でも、特にアクティビズムに関連するものとしては以下のものがあげられる。社会政治的発達理論（SPD）において第3段階以降のアクティビズムの段階に移行するには、現状の表面的理解や短絡的な原因に着目するのではなく、エンパワメントや批判的認識が不可欠で、その視点から生れてくる不満、憤り、共感、その他の感情を認識し、それが有益な変化を起こしたり、創造したりするために必要なアクションの原動力となるとされている。また、同じように社会的共感の理論枠組みでも、差別や偏見となっている他の集団の現状を、歴史的、社会的、政治的、経済的な観点から理解し、社会正義への認識が高められることで対人的共感が社会的共感へと移行し、社会的に恵まれた集団の人たちの社会変革のための行動が促進されると考えられている。さらに、道徳性発達理論の最終段階では、正義の原則に基づき特定の個人や組織のためではなく、すべての人が公平に扱われるべきだという社会正義全般への認識が、アクティビズムへの参加に重要だとしている。アクティビズムの促進要因に関する実証研究に関する文献レビューにおいても、こうしたアクティビズム促進の理論的枠組み実証されたことを本稿では確認した。具体的には、LGBTQ+の人たちに対する偏見や差別の目撃や抑圧構造の気づきを通して対人的共感が社会的共感となり、そこから生まれる怒り、抵抗感、罪悪感、悲しみ、責任感といった感情や、自らの有するマジョリティ特権の自覚から、社会正義のために自ら有するマジョリティ特権を活用したアクティビズムへとつながるのである。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。